

〔巻頭言〕

バイオエタノール！？

岩 村 祥 吉

今春、5月25日に開催されました第17回研究会に会長が出席せず、大変申し訳ありませんでした。事務局からの連絡で、雨の中多くの会員のご参加をいただき盛会であったと伺いまして、大変うれしく思いますと同時にご講演くださいました先生方の貴重なお話を伺えなかったことがとても残念です。私と同じく残念ながら研究会にご出席頂けなかった会員のみなさまとともに、今号を精読させて頂き、ご講演内容につきまして勉強させて頂きます。

さて、環境問題への対応とともにエネルギー問題とも関連してバイオエタノールが世界的に注目されて、そのあおりをうけた形で飼料穀物の高騰が養豚経営においても大きな問題となっています。バイオエタノールが二酸化炭素の排出増加をどれだけ削減できるのか、あるいはエタノール生産過程に投入されるエネルギー（熱量）に対してエタノール燃焼の熱量の収支はどの程度優れているかはそれぞれ専門の解説書に任せるとして、食料問題との関連について少し考えてみました。

いくつかの新聞社のウェブサイトでバイオエタノールと食料問題というキーワードで記事検索をしましたところ、トウモロコシに代表される飼料穀物のみならず、大豆の作付け減による世界的な食用油の高騰やメキシコでのトルティーヤの価格上昇、サトウキビ増産のためのオレンジ畑の転作

や熱帯雨林の伐採など報道されており、エネルギーと食料が競合するのは避けるべきとの論調の記事が多く目につきました。その対策としては、廃材木やトウモロコシの茎などセルロースをエタノール原料として利用することが考えられるが、現在のところ商用化までには時間がかかると書かれていました。

今年4月に農林水産省生産局畜産部が開催した第1回配合飼料価格上昇対応生産性向上推進会議の資料 (http://www.maff.go.jp/lin/higgo_kojo/h190419/itiran.html) によるとアメリカでは昨年のトウモロコシ生産量の14.4%がエタノール生産に回されており、今年の見込みとしては20%以上、3～4年先には30%以上をエタノール生産に利用すると予測されています。アメリカにおけるトウモロコシからのエタノール生産の主流方式では、2007/08年には発酵残さ（DDGS）の発生量は2,500万トン以上となる見込みで、アメリカの輸出トウモロコシ5,000万トンの半量以上となります。そのため、この大量に発生するDDGSの飼料利用についての検討は大変重要な課題ですが、品質・成分のばらつき、形状がまちまちのためハンドリングが問題、栄養成分として粗脂肪含量が高く配合割合に制限があるなど、今後検討すべき点が多く挙げられています。

一方、国産飼料として飼料米の利用が検討さ

れ、一部ではその実証もされており、飼料米生産コストの低減と飼料米利用畜産物に付加価値をつけることによる差別化での普及拡大の試みも紹介されています。

さらに、母豚1頭あたりの産子数の向上、哺育・育成期の事故率低減のための飼養・衛生管理の徹底、人工授精の普及などによる養豚における生産コスト低減によって飼料価格の上昇に対処す

る方向が示されています。

現場で飼料価格の高騰に直面されている生産者の方々への行政としての対応は種々なされているところですが、研究からのアプローチとして実施すべきことが以上整理してきた中にいくつもあります。足元をしっかりと見て、さらに、自分の進むべき方向を見定めた上で、自覚と自信を持って着実に前進したいものです。